

## 関正フィールドノート（1）

藤沢隆史<sup>1)</sup>・高島孝宗<sup>2)</sup>・斉藤譲一<sup>3)</sup>・山谷文人<sup>4)</sup>・松田宏介<sup>5)</sup>・乾 茂年<sup>6)</sup>

<sup>1)</sup> 〒097-1201 北海道礼文郡礼文町香深村字ワウシ 礼文町教育委員会

<sup>2)</sup> 〒098-5823 北海道枝幸郡枝幸町三笠町 オホーツクミュージアムえさし

<sup>3)</sup> 〒097-8686 北海道稚内市中央3-13-15 稚内市教育委員会

<sup>4)</sup> 〒097-0101 北海道利尻郡利尻富士町鴛泊字富士野 利尻富士町教育委員会

<sup>5)</sup> 〒051-8511 北海道室蘭市幸町1-2 室蘭市教育委員会

<sup>6)</sup> 〒098-5704 北海道枝幸郡浜頓別町中央北2 浜頓別町教育委員会

## The Field Note of Tadashi Seki (1)

Takashi FUJISAWA<sup>1)</sup>, Takamune TAKABATAKE<sup>2)</sup>, Joichi SAITO<sup>3)</sup>, Fumito YAMAYA<sup>4)</sup>,  
Kosuke MATSUDA<sup>5)</sup> and Shigeto INUI<sup>6)</sup>

<sup>1)</sup> Rebun Town Board of Education, Kafuka, Rebun Is., Hokkaido, 097-1201 Japan

<sup>2)</sup> Esashi Town Museum, Mikasamachi, Esashi, Hokkaido, 098-5823 Japan

<sup>3)</sup> Wakkanai City Board of Education, Chuo, Wakkanai, Hokkaido, 097-8686 Japan

<sup>4)</sup> Rishirifuji Town Board of Education, Oshidomari, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0101 Japan

<sup>5)</sup> Muroran City Board of Education, Saiwaicho, Muroran, Hokkaido, 051-8511 Japan

<sup>6)</sup> Hamatonbetsu Town Board of Education, Chuo, Hamatonbetsu, Hokkaido, 098-5704 Japan

**Abstract.** Tadashi Seki(1912-1987) was an amateur archaeologist in Wakkanai, Northern Hokkaido. His field note, deposited in the Rishiri Town Museum, is what remains of his historic investigations on the history of Northern Hokkaido, Sakhalin, Muroran, and other locales. It stands alongside his communiques with other researchers of Japan, collected from 1930 through 1974, and spanning 84 pages.

### はじめに

本稿は、利尻町立博物館に所蔵されている故関正氏のフィールドノートを採録したものである。ノートの内容は、1930（昭和5）年11月19日幕別行から始まるもので、1974（昭和49）年5月21日の日付まで84ページにわたって稚内、礼文、樺太、室蘭などの遺跡調査や研究者との交流が書かれている（西谷，1992）。

関氏の履歴については、西谷（1991）に詳述されている。本報告は、西谷榮治氏が翻刻されたデータをもとにし、各者が註を付記したものである。註

の箇所については、肩文字を入れた。

### 凡例

掲載資料に付す年月日は西暦（和暦）・月・日の順で記した。掲載資料の表記については、以下のようにした。

- 1 採録資料は原則として原資料の表記に基づき翻刻した。資料内容の表現や言いまわし、文法上の誤りなども、資料作成者固有の表現として尊重し、そのまま記した。
- 2 本文は基本的に新字体・新仮名遣いで統一し

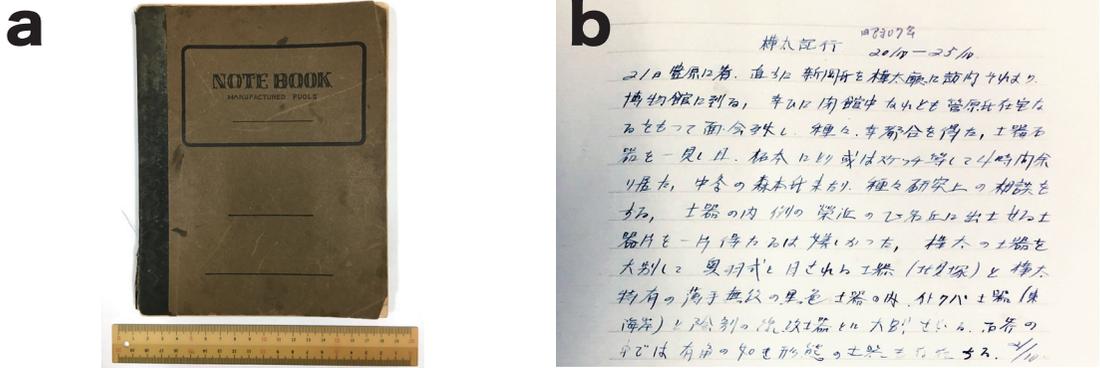


図1. フィールドノート. a: 表紙, b: 25 ページの一部.

た。地名・人名の固有名詞で特に必要と認められるものについては、原資料の通りとした。

- 3 通読の便を図るため、校訂者の判断で適宜読点を付した。また、人名・地名を列挙する場合は並列点を用いた。

1930 (昭和5) 年 11 月 19 日 幕別記行

一度行って見たいと思って居った幕別<sup>1)</sup>へ遠いに行く事が出来た。それも雪の一尺もあって地形とか地勢を見るのには全然駄目であった。豚を買えに行つた其の余暇に遺跡を尋ねると言う事は気の楽なものではない。

何時だったか十月中に声問へ採集に行つた時、帰りの列車の中で幕別へ行つたらあると云う事を二度聞いた事があつた。それから行き度いと思つても、なかなか行く用事がなかつた。幸いに豚を買いに行く用意が出来たのだった。深い雪に埋もれた遺跡は何処にあるのかちつとも分からなかつた。でも好天気で尻尻の山は声問沼<sup>2)</sup>の彼向にぼっかり浮いて居つた。そして枯木のぼつりと立つた景色、一体の雪の広野、殖民地、北見の感を深くした。そして農事試験場<sup>3)</sup>を訪ねた。此の種の探訪は始めてであつたので危ない気がした。でも会つて見たら大した事もない濟んだ。早速尋ねて見たらあるとの事、嬉しかった。又新しく遺物の地名表に書き加へられるかと思つたら心から嬉しかった。そして又其の集めた遺物を板に結び着けて整理してあつた。場の主任は

小松勇氏と云う温厚な方である。確か北大の実科を出た様に聞いた。

一時間位で去つた。が、来年又再び来る事を約束して帰つて来た。遺物下の如し。

大正 12 年発掘 石槍 6 点 皮はぎ 2 点 竪穴 9 土器片 8 点 石斧 5 点

土器片は声問に出づるのと同一形式なるも焼度高く白色を呈す。模様は無紋にて陰刻の線二本有、石器の製作は進歩して美しき十勝石製なり。声問郵便局長白井氏の声問駅<sup>4)</sup>附近より出土せるを所持せるを聞きたり。

来年再び訪れるを楽しみに帰れり。

11 月 28 日 抜海,,, 坂ノ下行

今日急に用事が出来て抜海へ行つて来た。そして帰りに 4 里の道を歩るいて坂ノ下へ行つて井口氏を訪ねた。時に午後 1 時。そして昼飯を頂いて息子さんと遺物採集に出掛けた。場所は坂の下より稚内へ行く道の下であつた。

井口常藏氏所有畑地より幾分出土せり、右土器は如何なる統系に属するかは未だ判明せず、完全なる石鏃一本、土器片数片を得て帰る。土器片は縄紋式土器なり。20 分の時間で帰る。何とか出土地名を附せねばならない。

11 月 20 日

隣りの正ちゃんより尻白<sup>5)</sup>に頭骨の出たのを聞いた。来年若し行く時があつたら尋ねて副葬品を発掘

して見たい。佐野氏所有畑地。

又、尻白郵便局長石田氏も所持せらるると聞く、一度は是非行こう。

12月19日

突然沼川へ行く事になって一里位行って来た。そして小学校で土地の様子を聞いた。沼川駅裏<sup>6)</sup>の川の岸の畑に石鏃が分布して居るとの事だ。又、留地駒木家に石鏃があるとの事、又稚内の燈台<sup>7)</sup>の下に石鏃があるとの話し、一時間位で去る。

片山氏所有畑地に出る由 (1931-5-16)

1931 (昭和6年) 年3月22日 小樽記行

20日札幌尚古堂で北海道人類学雑誌<sup>8)</sup>を手に入れる。唯し一冊で絶版との事である。えぞ往来2号に関する関場不二彦氏<sup>9)</sup>の論文が出るとの事である。

22日朝8時橋本老<sup>10)</sup>を訪問。種々の話の終わりに拓本を二枚とったが大変上手にとれた。橋本氏絵が下手だからと云ってミルンの古代文字を描かせられた。小樽新聞に出すと云う事であった。其の時稚内の大型土器一(高橋八郎氏)の事に関し云われたがあれは全然偽物であるとの事であった。それは喜多貞吉氏<sup>11)</sup>の考証である。小生等も稚内にて種々聞いて居た事で、¥300なら売るとか¥350で質に入っていると聞いて居たものであった。今度は何でもないや。橋本老はまだ余市で作った偽物の土器を見た。素晴らしいものであったが焼が硬く少し光沢があるから type はアイヌ式でも焼きはカマドで焼いた事がうかがわれる。それから古代文字の話へと伝わって老は偽物であるらしいと云って居た。

11時辞去し西田氏<sup>12)</sup>へ致る。

西田氏に面会す。例の古代文字の話だが先生は非偽刻の御大である。関場氏が古代文字を否定する依度に於いて氏も又(非)偽刻に反射する事が出来ると云って居る。即ち前者は日野氏の偽刻、後者は日野氏以前に発見者ありと云う事である。両者相譲らずでしょう。近く何等か問題になるのではなかろうか。小生は古代文字の比較的新しく三百年位と推測すると云った。つまり土器表面文様としての存在を肯定するのならばそれに対する年代も略同一である

事を首肯せしめる。然るに其の遺物は原史時代のものであつて決して古いものではない即ち北海道最後の土器と云うを得るであろう。故に手宮彫刻と土器表面紋様との関係が年代を決定するであろう事を述べた。それから南部八戸の土器に附いて述べたのを聞いた。うんと御馳走になった。

1時去る。

21日新海氏宅でハニワを見た余りに新しい感があった。徳川氏時代のものと思われる。又は最近の偽物らしい。とに角余りに偽物の多いのは感心した。

23日塩谷行。十一時の汽車で向かう。新岡氏<sup>13)</sup>を問う。幸いに在宅であつたので面会した。彼氏の甚だ深いのには一驚した。今「北海道石器時代土器之研究」とか云う大物を書いて居った。非常に新しい事だ。Scrap Bookをお互いに交換しながら研究しあつた。

久保田氏を問うも不在。色々研究上の話のあつた終わり辞去した。停車場迄遠い路を送って来て呉れた。若き Archeologist の多幸を祈る!

五十嵐氏<sup>14)</sup>の北海ポストに出した論文を読む。土器の変遷、に就いてのものらしい。右は器物に就いて赤堀氏の論らしい。

論文の先の尖った土器一円筒型(過渡期)一縄文一ヤヨイ式一 etc

内ヤヨイ式は擦紋土器、或いは陰刻條状線土器等と等しい。且つて9月に五十嵐氏訪問の際聞いた事であった。

4月26日 声問調査

第一回調査を26日に決行す。一番列車で行き直ちに声問沼に向かう。秋田木材会社<sup>15)</sup>よりは雪積2尺余りに及び沼岸に行きしも調査不可能なりし。融雪を待つて船にて川より行くを良いと思う。早速引き換えし駐在所裏手にて石鏃2本土器片数個を得、及び打製石斧らしきものを拾取す。それより右岸に到り三角点<sup>16)</sup>に向かう。停車場<sup>17)</sup>より十分にして三角点に到る。三角点にて石槍を拾う。土器片数片を得、唯例の石槍の出ずる所は積雪にて調査不可能なりたり。それより停車場裏立穴に到り土器片及び石片を得、大した収穫はなかつたが第一回とし

ては上の部と思わる。石器の四、五点及び黒色土器の模様の別種のもので得た事は甚だ重要な事と思われた。12時の汽車で帰る。遺物を多く集めるより整理して系統を立てて研究した方がより以上である事を悟った。

#### 4月28日 燈台下調査

第2回として稚内燈台下へ向かう。3、4人の方から燈台下に遺物が出る事を聞いて居ったけれど調査の機会なく今日に至った。雪未だ少しくあるので完全なる調査は出来なかった。けれど初めての箇所石片を見出し、又土器片を見出し得た事は嬉しかった。土器片は薄手にして縄文土器なり。口縁部に内部より丸く穴を押し上げあり、声間駐在所裏の遺物と同一のものと思われる。唯之に依って分布が明瞭にされた事は喜ぶべき事だ。又二週間もしたら融雪を得つつ調査に向かう積もりだ。

午後より久産留<sup>18)</sup>に向かう。土器数片を得、例のものよりと変わらざるものもあつたようだ。早く全部整理したいと思う。

#### 5月8日 燈台下調査 Light house

官舎裏より石鏃一本を得、元気ついて直ちに燈台下<sup>19)</sup>へ向う。先の時よりは雪が消えて居たので調査に都合が良い。空は青空で利尻の山も又樺太の島も望見する事が出来た。採集の結果は燈台直下の畑で石鏃1本、破片2本、石槍1本、石器(用途不明)1、土器十数片を得。

土器は全部が縄紋式土器にして上縁部には穴をうがちあるを見る。他は見るべきものなし。

#### 5月2日 抜海行

手間取りに抜海に行く。抜海岩砂地で土器数片を得。土器底部のものを得。

#### 5月13日 幕別記行

福沢牧場<sup>20)</sup>へ牛を見に行く。天気は日本晴れ。うぐいすは鳴く。利尻の山も稚内の小山もほのかに見える。そして牧笛がとても美しい。melodyを演ずる。2時半、農事試作場に向う。小松氏に会って来

意を伝う。小松氏忙しい中に色々御世話をして下さいました。謹んで御礼を申す。土器片是一片も得る事がなかったが石器は石槍を三本得、石鏃の不全のものを一本得、全部試作場に置いて帰る。試作場の土器は確かに弥生式土器と考えられる。もう少し資料が集めてから研究したいと思う。終わりに小松氏に感謝す。

#### 5月16日 カニ工場裏調査 10p

北官舎裏より神社<sup>21)</sup>の方へ調査中カニ工場裏畑地の砂の中に土器片を発見す。土器片は久産留出土のものと同様なりも唯ジグザッキング模様のもので多い様である。模様は明瞭にして陰刻の程度は深い。焼きは巧微。模様は複雑である。石片の一片をも得ず全く石器を伴わぬものと思われる。

後日の再調査を待つ。

#### 5月10日 ラジオ放送 p10

Radioで西田氏の「北海道石器時代遺跡を尋ねて」をタカ田歯医者で聞く。最もPopularであつた小樽新聞に僕の土器が出て居った。ちょっと嬉しい。支庁の冨田氏<sup>22)</sup>と云う方に各地の遺跡の事を聞いた。浜頓別の細野農場に出土する事。下勇知の沼の附近砂地海岸、枝幸の下ホロベツ川のチャシ及び鬼土別と知来別との間に出土する事等と随分有益になった。今後ともに指導されんことを願う。冨田氏に感謝す。

#### 6月9日 沼川調査

一番列車で向かい仕事の後調査す。駅<sup>23)</sup>裏手の川淵より丘を調べ。畑地<sup>24)</sup>より石器片の一片を得。十勝石製のもので破片なりと思考せられる。他は全然破片すらも見受けられず。此の調査は昨年より沼川小学校<sup>25)</sup>にて聞きしものである。之によって明瞭に同地にも石器時代の在りし事を語るものと思われる。それより声間に向かう。例の三角点を訪ねたが少しも得る所がなかった。それより郵便局に白井氏を訪ふ。

白井氏の言によれば声間沼の向こう岸にも石器時代の遺跡のある事を云って居った。堅穴もあるとの

事である。なお一昨年であったか人骨の化石が出たと云う事であるが、それは沼中へ農夫が投入せりととの事であった。

尚地方は化石の出土によって有名な所で其の時にもカニの化石が出土せりととの事であった。不思議ではないが人骨の化石と云うと旧石器時代と考えられるのではなかろうか。なにしろ一研究する必要がある。

#### 6月14日 幕別三角点山調査

突然能<sup>26)</sup>を買う事にしたので正午の列車で幕別に向かう。昨日白井貢氏より頂きし大石片の出土地調査の意味で又小松勇氏の言にもより以前より調査の必要を認めて居たもので小松氏と同行で発掘並びに調査せり。2時頃試作場に到り早速氏と同行す。地点は幕別より稚内寄りの丘の続きの端で其処に腐朽の三角点を認む。台地の上にして平らにして稚内、声間、宗谷、幕別、声間沼を一望し得る景色の地にして往時住居し得べきかと感ず。五年以前に畑地にした地点にして現在は畑地の跡と見らる。地質は砂にして表面甚だ薄し。広さは二百坪の平地なり。小松氏と試掘して見るに十勝石の破片混在し且つ土器片を得る。五ヶ所試掘の結果表面より五六寸の箇所にして一尺に到ればロームに到る。土器片は三点得たれと焼きの粗雑なる直線式縄文土器にして声間三角点との関係は遺物の僅少なるに依り判明せざるも少なからず関係あるものと思われる。遺跡としてはチャンに類似のものに非らざるかと思われた。来年春先再び調査致す事にす。同行の小松氏に厚く感謝する。

声間白井氏より同地出土と云われる石器片を得、十勝石製のものにして石槍の破片かと信ずる。

#### 6月18日 サラキトマナイ貝塚調査

梅津氏の言によれば貝のある沢あるに依り先住民の遺跡に非らざるかとの疑いをもって本日千里の道を行って調査せり。4線の櫻井氏の所より宮前氏宅に到り案内を乞う。結果は沼の貝にして僅かに層をなすにとまる。残念と思ひ乍ら2時帰宅す。

#### 7月26日 宗谷尻白調査

永らくの望みであった此の方面の調査が出来たので嬉しかった。朝一番列車で声間に下り自動車にて宗谷に向かう<sup>27)</sup>。一直線に尻白へ行き直ちに郵便局長石田氏を訪問す。幸いに石斧、石鏃、石匙及び化石を一見す。それより氏の案内にて向こうの山に向かう。山は一体に畠にて石片及び土器片散在す。この土地を考察するに山の出鼻にて三十間位の箇所より掘りを作り明らかにチャンなりと思われる。この地方にて始めて発見せる所である。

それより尻白小学校<sup>28)</sup>に至り昨年佐野氏畠地より出土せる所の人骨を見る。頭骨の一部欠損せるも全形を見る事が出来る。それより二時に宗谷小学校に三上先生<sup>29)</sup>を訪ぬ。先生は当地方に於ける研究家の第一人者にして余程深奥のものと思う。氏の宗谷の歴史に就いてのplintを見る。田舎の教師としては珍しい。他日何か資料を提供する事があると思う。実に温厚な人であった。一つ援助してやろう。尚氏の案内で裏の山へ即ち臺場の裏山へ行って見たがたいした事はなかった。それより三時の自動車で声間に向かう。途中三角点に寄り石斧一本を拾う。初めての採集であった事を喜ぶ。それより五時の自動車で稚内に帰る。

石田氏より石斧、化石二個を貰う。又土器片を採集せり。

自動車賃は声間より尻白迄¥120、宗谷迄¥80なり。後の為記す。又石田氏より貰い得けたる石斧は全く類型を求められない点を特に記す。

#### 9月10日 浜鬼土別調査

昨年からの宿願であった浜鬼土別<sup>30)</sup>への旅行はやっと果された。僕の調査の主眼たるや地名表に記載されて居る鬼土別の石鏃の発見についてであって、又石鏃が発見されて土器が発見されないという事の無意味を考えて調査せる次第であった。早速学校へ至り校長平元氏と会談するも、何等得る所なく且強く石器の出土を反対す。非常に不愉快であったので、学校裏の台地に於いて石片及土器片及び完全石斧を発見し、大いに気を良くして横内氏宅に帰る。其日、知来別迄行きたれ共、何等の収穫に接せず。されど完全なる石斧の収穫に気を良くす。

## 9月11日 浜頓別調査

早朝 4:30 分に浜鬼士別出発し、6:30 分の列車にて浜頓別に至る。早速細野農場<sup>31)</sup>に至る。管理人菅原氏宅に行き未意を伝う。其の間宅地に於いて石器及石片を拾う。案内せられて畑地を見るに及んで石器の散布せるに驚ろく。それより堅穴のある箇所にて俄然貝塚のあるを発見す。表土は一尺余なり。且つ附近より土器を拾う。見れば円筒形土器にして古式のものなり。実に重用なる発見と思われる。後日再び当地を調査する積りである。

石斧 5 本 石槍 7 本 他の石器 3 本

## 9月13日 営林区署官舎裏調査

吉田氏より同氏宅に石鏃の出土せるを聞き早速向う。石片の散布するをもって遺跡と断定し、且つ比較的大形の打石器 1 本と細片の土器片を得る。果して同地が遺跡地なりや否やは甚だ疑問のある所である。他日の精査に待つ。

## 9月19日 幕別農事試作場堅穴調査

以前より発掘せらるべきであった同地堅穴に就いて、人夫三人を得て大発掘をなし得た。最初は直ぐ裏の堅穴を掘り、次に背面の斜面の堅穴を掘る。合計堅穴三個の発掘により何等得る所なきは、甚だ残念であった。此の報文は別に記載する筈。後日三角点を発掘する筈である。

## 10月17日 札樽記行

16日小樽で橋本老を訪う。度々なる決意を受けて二三の遺物を見せて貰った。就中木斧は珍中の珍として拝見した。その日に札幌に展覧会のある事を知って辞去した。

翌日札幌に行つて展覧会<sup>32)</sup>を見て□□氏兄妹に会う。三四の遺物を持参したので出品して事務所に休み、早々にして去る。

今回の記行で得たものは展覧会だけであった。

## 11月12日 声問沼北岸調査

今春雪中調査して失敗してから再び行くの日を待ったが雑草に災されて果たされなかった。幾度も

行くべく決心したけれども出来なかったのは残念だった。

朝一番で声問に向かい石川氏宅を訪問し詰所裏の畑地で土器片及び石鏃一本を拾う。それより声問沼岸に秋田木材会社旧宅<sup>33)</sup>より向かう。宮島なる一個の農家の燕麦畑に礫片の散布して居る事を発見し、約一時間余りにして石斧三本土器片、石器片多数取得して帰る。近來にない収穫であった。

その土器片より見るに坂の下の土器と類似のもの、三角点と同型のもの等実に多種多様の存在をなす。整理の結果は如何なる結論に達するかは疑問であるが坂の下の土器と三角点の土器と年代的に或いは連絡を発見できるかも知れない。又石斧の型式も相当面白く展開できるであろう。遺跡の広さは相当大きく丘陵の下一面であろう。他日の詳細な調査を希望す。

## 11月14日 幕別三角点丘陵発掘

予定の通り 13 日発掘に向かう。試作場小松氏を訪い人夫二人、助手一人に僕と小松氏と五人の同勢で地点に向かう。10 時現場に着の上早速今春調査の所より発掘する。最初に三尺の幅で三間表土を取り順掘りに掘り進めると石器片が少しずつ出る。土器片も少量出る。余り少ないので地点を変える。又三尺幅で三間余表土を取り進めると石器が出た。土器片が出るのが多くなった。そして又土器底部の破片したのが一かたまり出た。そのまま静かに取って新聞紙に取る。そして余り出土物が少ないので 11 時半発掘を中止して帰る。

この丘陵の下の道路工事場より石斧土器類が多数出土したのでその夜タコ部屋に拝見に行く。土器は酒徳利に似た焼度の高いものと模様の変ったものと高杯形の杯の如きものが出た。一度現場へ行つてみよう。

## 1932 (昭和 7) 年 1 月 9 日 カプトヌマ音吉アイヌ訪問記

ゆくりなく語る音吉アイヌ<sup>34)</sup>の昔話も又面白いと思った。9 時半着私用を済まして音吉を訪ねる。時に 10 時。年は 76 歳。生まれは礼文島。それか

ら宗谷に来又稚内遊広附近に住む。抜海に行きカブトヌマに落ち着く事、本年で36年になる。これが来歴で経験は熊を獲る事、82頭の多きに上るも彼氏ほこらず甚だ収穫の少なきをなげく。話中にCorobokkul un Kuruの実在を問う。彼は全く話にすぎない事を語る。

そしてカブトヌマにもその実在するを断言した。事実自分も同所の堅穴から得た土器片を所有して居た事を云ったし又石斧の類も出土した事を語り、Korobokuruに話附けるも面白い。それからチャシコツに付き問うに稚内の吉武銃砲店の裏山がそうだと語ったし又税務所の裏山も又リヤコタンの土をとった所もそうだと語ったが真疑は全く不明で他日の調査に研究は待ちたい。それからIkpashi<sup>35)</sup>を一本貰ったがIkashi shiroshiに附いて問うた所、祖先の卵だと語って居たし、熊の子の頭骨を調べたものに対しては(カムイ)マラトカムイと云って尊敬して居った。それからチャシに就いては敵が攻めて来ると上から物を落としたりしたものと語って居り全く戦闘用のものと語るも寄違に感じた。

1931(昭和6)年12月 豊富瀬賀老訪問記

商用で行った時暇を造って訪問。

遺物中の主なるものは土器5コ、石斧3本その他の遺物であった。就中感じたのは三味線と且つ石斧であった。三味線は丸太を半分にして中をくり抜き上に枝をはったものであった。糸巻きは実に粗末であったが現在のものと変わってない。

石斧は幕別三角点より得たもので実に見事なものであった。話し中に幕別三角点を開墾したのは自分であると悟り当時は山の上には堅穴が大分あった事を語って居ったが、これを確実に握るべきなものもなかった。声問の三角点には人骨が砂中にそのままになって出たと語って居た。唯得た所の事は三味線や石斧や話であった。

他はノートに再び話す日のある事を祈った。

1932(昭和7)年3月6日 札幌記行 河野広道氏訪問

気の向き次第で河野氏<sup>36)</sup>を訪問した所幸在宅

し又高倉氏<sup>37)</sup>及び後藤氏も居られ種々漫談<sup>38)</sup>する。色々お話の上土器類を拝見させて頂いた。何と素晴らしい蔵品の数々であった。自分の所有の貧弱さがしみじみ感じられる。土器の内円筒形土器に就いて親しく教示され僕も嬉しかった。土俗品の有名なIkpashiも大変な数々である。僕の一本とは情けないじゃないか！ 4時40分の列車で帰るべく辞去する際に江別出土の土器のModel<sup>39)</sup>を三個頂き且つ片々を頂いたのは有難かった。

とに角素晴らしい本と土器の大量にのめされた。終わりに若き博士の健在と奮闘を祈る。

9/ III 記

3月7日 名寄田中氏訪問記

夜岩見沢駅を出立し朝4時40分名寄着。7時頃商用で松田氏を訪問。後十時頃田中弁護士訪問す。快く面会して種々の土器類を見物させて頂く。主として石器は名寄の高見公園の畑地出土であるが、土器は出ざるも石器は随分出る様だ。ギフ団体の居る地点<sup>40)</sup>では円筒形土器が出土する。又、チトウ<sup>41)</sup>にも相当の出土がある様だ。仲でも枝差の土器類が面白い。主として樺太の土器類である事が面白い。イクトバ土器、及び原形の柳葉状等と面白い。又、モンベツからでた土器類も無紋の波紋土器類似のものである。石器は別段変化はないがC型が多い。ギフ団体から出る石器に石冠まがいのものが出る。全く不明のものである。一個頂いた。

それより折良く松宮氏(名寄町病院院長)来たり。土器の所有せられるを聞き早速同行し一見するに全く完全の土ナベであった。全く珍品である。小生も感心した。それよりサル出土の土器片を得て帰る。種々御馳走になったことで感謝する。

4月20～25日 樺太記行

21日豊原に着。直ちに新岡君を樺太庁に訪問。それより博物館に至る。幸いに閉館中なれども菅原氏<sup>42)</sup>在宅なるをもって面会致し、種々、好都合を得た。土器石器を一見し、且つ拓本にとり或いはスケッチ等して4時間余り居た。中学の森本氏<sup>43)</sup>来たり。種々研究上の相談をする。土器の内、例の榮

浜の乙名丘<sup>44)</sup>に出土せる土器片を一片得たるは嬉しかった。樺太の土器を大別して奥羽式と目される土器<sup>45)</sup>(北貝塚)と樺太特有の薄手無紋の黒色土器の内、イトクパ土器<sup>46)</sup>(東海岸)と陰刻の線紋土器<sup>47)</sup>とに大別される。石斧の中では有角の如き形態の土器も存在する。2/10・23日本斗<sup>48)</sup>に向かう。木村信六氏<sup>49)</sup>なる巡査と会ってトコンボ<sup>50)</sup>に向かう。トコンボには声間附近の出土と同様の辨天島土器が出土する。その間に内耳式も出土せりとの事であった。又、擦紋土器の二片が内幌のウニ<sup>51)</sup>なる所の堅穴より二個出土せり。之が北海道と樺太の関係を示す擦紋土器である。24日貝塚<sup>52)</sup>に来たる。学校<sup>53)</sup>を訪ね、校長と附近の遺跡を尋ね堅穴の七個ある丘陵にチャシらしきもの<sup>54)</sup>を発見する。学校裏にて石斧一本出土せるを採集す。土器片も点に得たり。

#### 5月1日 声間沼附近三角点第一回調査

朝八時出立。三角点に到り調査する。土器片も幾分少なく散在する。たった一片の土器片を得た。別段採集する意志もなく日向ぼっこする。昼の列車で帰る。尻白の坊主と会って話したら石斧を呉れるから是非来いと云う。1-5-1932

#### 5月8日 音吉アイヌ座談会<sup>55)</sup>

工藤氏と奥野氏と小生一番にて兜沼に向かい音吉アイヌと三人で語り定刻11時より続々参会者あり。盛大を極むる。梅村氏の開会の辞ありて音吉の地名解から始まり2時に地名に関する研究は打ち切り。食事後は音吉の実物見物と説明あり。熊祭りの歌或いは俗謡に至っては益々感心させられた。4時に小生閉会の辞を述べ直ちに列車にて帰る。実に盛会であった。

参会者の名を書くと

奥野・関・内村・足立・梅村・梅本・高坂・鈴木・館村・金子・浅野・金子・高井・工藤・桑原・横田・堀内・長谷川・(道庁植民課)

#### 5月11日 浜頓別細野農場貝塚発掘

雨の浜頓別行きは淋しい。人夫一人を頼んで細野

農場へ向かう。例の貝塚を発掘する事にする。其の間附近の表面採集に依って石斧五本を得る。表土を取って貝層に達する。貝はホタテ貝、ホッキ・カキ貝等、混在して非常に新しく思われた様に、貝、完全に保存されて居て、僅か魚の椎骨の一片の出土と骨片の出土とに終わる。其の間、石器片も土器片も出土せず。単に見事な貝層に終わる。表土は一尺、貝層は二尺にして分布は少なく大略五坪位にて終わる様である。唯、予想が大きすぎた関係上、収穫の皆無には泣かされた。それより沼の淵の散歩に堅穴三十余りを見る。余りにも方形と散布の大きに驚く。堅穴の中より擦紋土器が出土せるに考えられる。

#### 5月19日 ブタウス堅穴調査

商用でブタウス<sup>56)</sup>へ行く。時間の余りに堅穴へ行く。位置はブタウスのお宮の裏手の二m余りの丘に散在する。

全部が方形であって70個ある。二、三試掘せるも出ず。

#### 5月20日 1日市街調査

自動車にて旧市街地に出るに雷雨に会い僅か雨中五分余り学校の横、神社の円形の丘<sup>57)</sup>(高さ3m)の周囲と畑の中に土器片三片点出す。之でここを遺跡である事が分かった。唯、対岸の牧場の中に同様のものあるを見出したが、雨中で見られぬを残念に思った。

他日、行く事もあるが其の節に調査を譲る。

#### 5月24日 幕別三角点下調査

十時到着。途中蛇に驚かされ乍ら行く。三角点山の下に道路築造の際、取り壊した斜面に土器片が点出す。そして取った土の跡に朝鮮土器と似た土器片二片を得た。又、疑問の同筒型と同様の土器の模様があった。他日整理しよう。

#### 5月30日 声間中田家裏

雨模様について声間に行く。断面に貝層の露出して居るのを先日見ておいたのでそれを発掘すべく来た。

貝層は表土二尺の下に一尺余り。ホッキ貝を主と

してホタテ貝もあるし、獣骨も又魚骨も貝よりも多い位に存在する。

土器片はほんの僅か存在し貝層の下部より無紋の不完全土器が出る。又、浮紋の土器が出ないのも又考えさせられる。骨片に切り跡があるものがあるが相当鋭利なもので切ったものらしい。畑の中の貝層の露出して居る所を発掘してみたが俄然猛烈に土器が出土する。やや完全のもの一を得、元氣を得て掘り進めると又も又もと出土して三個余り出た。明日でも暇を見て発掘に来たい。唯、完全なる土器の出土を望むのである。午に帰る。

6月30日 札樽旭記行

6月4日 橋本老訪問

午後4時近く橋本老訪問。朝鮮土器に就いて聞く。

6月7日 河野氏訪問

博物館<sup>58)</sup>にて日本原始工芸を一見し河野氏を訪問す。朝鮮土器を一覧させる。その他樺太土器に関する余の知見をつたえる。

6月8日 齊藤讓三氏訪問

唯だその変人振りに驚ろくのみと研究家ではなく単なる collect mania にいや味を覚える。然し、遺物は豊富であったし、浜頓別の遺跡に就いて二三聞いた。それから例の古代文学を否定して居ったし、小倉氏の古代文字石は全部疑物であるそうである。

6月18日 沼川31号調査

曲淵の石原新蔵氏を訪ねたが不在なので沼川へ引返し櫻岡<sup>59)</sup>附近調査に向う。午後一時花本勝氏宅を訪問し遺跡の存在を問う。果して近くに出土する事を確め案内を乞い、南吉蔵氏の畑地にて石槍及び石片を得たり。

それより南氏を訪問せる所、大正14年の発掘にして現在石槍12本、scraper4本、石斧2本を所有する。石斧は小形のものにして局部磨製の片刃である。

それより、6時頃今一度遺跡を調査せん所土器片三点を得、実に愉快であり、その土器片は三角点と

同様である所の円筒形縄文土器であった。これで声間川の上流の様子が判明した訳である。他日整理して発表したい。

天塩川上流遺物訪問

6月22日 I 思根内笠原晴雄氏訪問

笠原氏を朝6時に訪問。1500点余りの品々を見る。石鏃は127点、全部有柄、scraper59点、sandstone、石斧40本にして局部磨製、判出土器は円筒型、声間三角点とは余り変化ない。9時去る。

石斧の中に珍らしき型が二個あった。一は刃部の丸きもの即ち「丸のみ」の如きものである。一は握りに便なる様に磨いてあるものである。そして円頭scraperは非常に大い。

22日 II 矢口名寄高女校長訪問

3時名寄着。直ちに高女へ向う。幸ひ自宅に居り直ちに用件を話す。非常に歓待された事は生れて始めての様だ。

そして所有品を一見するに石器が豊富で土器片が少ないらしい。円筒型が大。

土器を分類すれば高杯型3個、擦紋土器、円筒型土器、wakkanai式土器、紡績土器2点、無紋土器。出土地は主として智東である。又、スリ切の磨石斧が大。局部磨製1本。(くの字に曲る)又、横型石鏃1本、円頭皮ハギ、大。

沙留<sup>60)</sup>の堅穴は100個余り、景色無紋土器、擦紋土器出土す。12時帰る。

8月10日 樺太北見塚発掘調査

10日新岡兄と北見塚<sup>61)</sup>へ10時の汽車にて向う。新場<sup>62)</sup>迄行って新場の市街を探す。第一地点にて土器片及び石片を拾い、第二地点たる南斜面に向う。石器及び土器片を採集する。石斧は5本にて集獲である。

それより北見塚へ12時に向う。12時半到着。早速調査に移る。貝塚の断面より、発掘したが得る所が少なく、表面採集に移る。乳房状土器及びイトクバ土器を得る。石斧及び石鏃を得。唯だ、土器に縄文土器の有無をさえ発見出来得れば幸いと思っていた。

それより、一の沢<sup>63</sup>に向う。途中疲れて弱ってしまった。新岡兄に助けられる事甚し、一の沢で青玉<sup>64</sup>を拾い、土器片及び石器片を得る。新岡兄石斧を得た。これで、一の沢も石器時代であることを確認する。

その夜、整理と研究の交換とをcaféで行うた事を喜ぶ。帰りに駅迄見送られ又、落帆<sup>65</sup>の土器片を得た事を喜びたい。切に新岡兄の健闘を祈って止まない。8-11th

#### 9月10日 宗谷尻白調査

宗谷から土器石器の出土のないのを残念に思っ調査することにして旅立つ。自動車にて到着。役場<sup>66</sup>を訪問して村岡氏に面会して話を聞くも要を得ないので、学校に至るも授業中で寺<sup>67</sup>を訪問する事にする。寺の裏一面に黒曜石の破片中から石鏃

を得る。有難く頂戴する。畑の中で縄文土器を得る。これで宗谷はもう用はないので piri katai<sup>68</sup>に向う。Orannai<sup>69</sup>の村上運吉アイヌを訪れるも漁中にて用を達し得ず sannai<sup>70</sup>に向う。orannaiにて石鏃を得る。Shiniuois<sup>71</sup>の入口にて石鏃土器片を得る。それより、お寺に向う。都合よく住職が居たので石鏃石斧を得土器の採集にかかる。土器は縄文土器にして厚手で少し面白い。石斧二本を得るも局部磨製である。石匙も一本を得る。時、4時30分。

それより郵便局長石田氏を訪問して石斧をスケッチする。考えて見ると樺太のと似て居る様だ。石匙と石槍を貰らって辞去する。雨降る。

自動車で宗谷小学校に至り、三上校長と談合して旅館に去る。翌朝、稚内に帰る。

(註及び参考文献についてはパート2に一括掲載する)